

あの頃の自分の事

芥川龍之介

青空文庫

以下は小説と呼ぶ種類のものではないかも知れない。さうかと云つて、何と呼ぶべきかは自分も亦不案内である。自分は唯、四五年前の自分とその周囲とを、出来る丈こだはらずに、ありのまま書いて見た。従つて自分、或は自分たちの生活やその心もちに興味のない読者には、面白くあるまいと云ふ懸念^{けねん}もある。が、この懸念はそれを押しつめて行けば、結局どの小説も同じ事だから、そこに意を安んじて、発表する事にした。序^{ついで}ながらありのままと云つても、事実の配列は必しもありのままではない。唯事実そのものだけが、大抵ありのままだと云ふ事をつけ加へて置く。

一

十一月の或晴れた朝である。久しぶりに窮屈な制服を着て、学校へ行ったら、正門前でやはり制服を着た成瀬^あに遇つた。こつちで「やあ」と云ふと、向うでも「やあ」と云つた。一しよに角帽を並べて、法文科の古い煉瓦^{れんぐわづくり}造の中へはいったら、玄関の掲示場の前に、又和服の松岡がゐた。我々はもう一度「やあ」と云つた。

した。幸、^{さいはひ}ロオレンス先生は我々の机の間から立昇る、縷々とした一条の煙に気がつか
なかつた。だから出席簿をつけてしまふと、早速毎時もの通り講義にとりかかつた。

講義のつまらない事は、当時定評があつた。が、その朝は殊につまらなかつた。始から
のべつ幕なしに、梗概^{かうがい}ばかり聴かされる。それも一々 Act 1, Scene 2 と云ふ調子で、一
くさりづつやるのだから、その退屈さは人間以上だつた。自分は以前はかう云ふ時に、よ
く何の因果で大学へなんぞはいつたんだらうと思ひ思ひした。が、今ではそんな事も考へ
ない程、この非凡な講義を聴く可く余儀なくされた運命に、すっかり黙從し切つてゐた。
だからその時間も、機械的にペンを動かして、帝劇の筋書の英訳のやうなものを根氣よく
筆記した。が、その中に教室に通つてゐるステイムの加減で、だんだん眠くなつて來た。
そこで勿論、眠る事にした。

うとうとして、ノオトに一頁ばかりブランクが出来た時分、ロオレンス先生が、何だか
異様な声を出したので、眼がさめた。始めはちよいと居睡りが見つかつて、叱られたかと
思つたが、見ると先生は、マクベスの本をふり廻しながら、得意になつて、門番の^{こわいろ}声^{こわいろ}
色^{こわいろ}を使つてゐる。自分もあの門番の類だと思つたら、急に可笑しくなつて、すっかり眠氣
がさめてしまつた。隣では成瀬がノオトをとりながら、時々自分の方を見て、くすくす独

りで笑つてゐた。それから又、二三頁ノオトをよごしたらやつと時間の鐘が鳴つた。さうして自分たちは、ロオレンス先生の後から、そろそろ教室の外の廊下へ溢れ出した。

廊下へ出て、黄いろい葉を垂らした庭の樹木を見下してゐると、豊田実君が来て、「ちよいとノオトを見せてくれ給へ」と云つた。それからノオトを開けて見せると、豊田君の見たがつてゐる所は、丁度自分の居眠りをした所だったので、流石に少し恐縮した。豊田君は「ぢやようござんす」と云つて、悠然と向うへ行つてしまつた。悠然と云ふのは、決して好い加減な形容ぢやない。實際君は何時でも、悠然と歩いてゐた。豊田君は今どこで何をしてゐるか、判然とした事は承知しないが、ロオレンス先生に好意を持ち、若しくはロオレンス先生が好意を持つた学生の中で、我々——と云つて悪るければ、少くとも自分が、常に或程度の親しみを感じてゐた、たつた一人の人間である。自分はこれを書いてゐる今でも、君の悠然とした歩き方を思ひ出すと、もう一度君と大学の廊下に立つて、平凡な時候の挨拶でも交換したいやうな気がしないでもない。

その中に又、鐘が鳴つて、我々は二人とも下の教室へ行く事になつた。今度は藤岡勝二博士の言語学の講義である。外の連中は皆先へ行つて、ちゃんと前の方へ席をとつて置くが、なまけ者の我々は、何時でも後からはいつて行つて、一番隅の机を占領した。その朝

もやはりかう云ふ伝でんで、愈鐘いよいよが鳴る間際まぎはまで、見晴しの好い二階の廊下に、ていくわい徊わいしてゐたのである。藤岡博士の言語学の講義は、その朗々たる音吐とグロテスクな諧かいぎやく諷ふうとを聞くだけでも、存在の権利のあるものだつた。もつと尤も自分の如く、生来言語学的な頭脳に乏しい人間にとつては、それだけで存在の権利があつたと云ひ直しても別に差支へはない。だから今日も、ノオトをとつたりやめたりしながら、半分はさう云ふ興味で、マツクス・ミウラアがどうかしたとか云ふ講義を面白がつて聴いてゐた。すると自分の前の席に、髪の毛の長い学生が坐つてゐて、その人の髪の毛が、時々自分のノオトの上を、掃くやうにさらさら通りすぎた。自分は相手が名前も知らない人の事だから、どう云ふ了見で、あんな長髪を蓄へてゐるのだか、つい今日に至るまで問ひ質ただす機会を失つてしまつたが、兎に角それが彼自身の美的要求には合してゐても、他人の實際的要求と矛盾し得る事を発見したのは、正にこの言語学の講義を聞いてゐた時間である。しかし幸さいはひ、その講義を聴かうと云ふ、自分の實際的要求がそれ程痛切でなかつたから、髪の毛が邪魔になつた所だけは、ノオトをとらずに捨てて置いた。その中には邪魔にならない所でも、ノオトの代りに画を描く事にした。処が向うに坐つてゐる、何とか云ふ恐しくハイカラな学生の横顔を、半分がた描いた処で運悪く鐘が鳴つた。講義の終を知らせると同時に、午ひるになつた事を知らせ

る鐘である。

我々は一しよに大学前のいつぱくしや一白舎の二階へ行つて、ソオダスル曹達水に二十銭の弁当を食つた。食ひながらいろんな事を弁じ合つた。自分と成瀬との間には、かなりかけへだ可也懸隔てのない友情が通つてゐた。その上その頃は思想の上でも、一致する点が少くなかつた。殊に二人とも、偶然同時に「ジアン・クリストフ」を読み出して、同時にそれに感服してゐた。だからかう云ふ時になると、毎日のやうに顔を合せてゐる癖に、やはり話がはずみ勝ちだつた。すると二人のゐる所へ、給仕の谷がやつて来て、相場の話をし始めた。それも「まかり間違つたら、これになる覚悟でなくつちや駄目ですね」と、手を後へまはして見せたのだから盛である。成瀬は「ばか莫迦だな」と云つて、取合はなかつたが、当時「財布」と云ふ小説を考へてゐた自分は、さまざまの意味で面白かつたから、食事をしまふまで谷の相手になつた。さうして妙な相場の熟語を、十ばかり一度に教へられた。

午後は講義がなかつたから、一白舎を出ると二人で、近所の宮裏に下宿してゐる久米の所へ遊びに行つた。久米は我々以上のなまけ者だから、大抵は教室へも出ずに、下宿で小説や芝居を書いてゐたのである。行つて見ると、やはり机の側に置おきこたつ炬燵を据ゑて、「カラマゾフ兄弟」が何か読んでゐた。あたれと云ふから、我々もその置炬燵へはいつたら、

掛蒲団の脂あぶらぐさ臭におい匂にほひが、火臭い匂と一しよに鼻を打った。久米は今、彼の幼年時代に自殺した阿父おとうさんの事を、短篇にして書いてゐると云つた。小説はこれが処女作同様だから、見当がつかなくて困るとも云つた。が、相不あひかはらず変元氣の好きさうな顔をして、余り困つてゐるらしい容子ようすもなかつた。その後で「君はどうした」と訊くから、「やつと『鼻』を半分ばかり書いた」と答へた。成瀬も今年の夏、日本アルプスへ行つた時の話を書きかけてゐると云ふ事だつた。それから三人で、久米の拵へた珈琲コオヒイを飲みながら、創作上の話を長い間した。久米は文壇的閱歷の上から云つて、ずっと我々より先輩だつた。と同時に又表現上の手腕から云つても、やはり我々に比べると、一日の長がある事は事実だつた。特に自分はこの点で、久米が三幕物や一幕物を容易にしかも短い時間で、書き上げる技倆に驚嘆してゐた。だから我々の中で久米だけは、彼自身の占めてゐる、或は占めんとする、文壇的地位に相当な自信を持つてゐた。さうしてその自信が又一方では、絶えず眼高手低の歎を抱いてゐる我々に、我々自身の自信を呼び起す力としても働いてゐた。實際自分の如きは、もし久米と友人でなかつたら、即彼の煽動せんどうによつて、人工的にインスピレーションを製造する機会がなかつたなら、生涯一介の読書子たるに満足して、小説などは書かなかつたかも知れない。さう云ふ次第だから創作上の話になると——と云ふより文壇に關

係した話になると、勢何時も我々の中では、久米が牛耳を執る形があつた。その日も彼が音頭とりで、大分議論を上下したが、何かの關係で田山花袋氏が度々問題に上つたやうに記憶する。

今になつて公平に考へれば、自然主義運動があれ丈大きな波動を文壇に与へたのも、全く一つは田山氏の人格の力が然らしめたのに相違ない。その限りに於て田山氏は、氏の「妻」や「田舎教師」が如何に退屈であるにしても、乃至又氏の平面描写論が如何に幼稚であるにしても、確に我々後輩の敬意——とまで行かなければ、少くとも興味位は惹くに足る人物だつた。が、遺憾ながら当時の我々は、まだこの情熱に富んだ氏の人格を、評価するだけの雅量に乏しかつた。だから我々は氏の小説を一貫して、月光と性慾とを除いては、何ものも発見する事は出来なかつた。と同時に氏の感想や評論も、その怪しげな [a' la Huysmans] の入信生活を聞かされる度に、先 Dural と田山花袋氏との滑稽な対照を思ひ出させて、徒に我々の冷笑を買ふばかりだつた。では我々は氏を目して、全然ハムバッグとしてゐたかと云ふと必しも亦さうぢやない。成程小説家としての氏や思想家としての氏は、更に本質的なものだとは思はなかつたが、それらに先立つて我々は、紀行文家としての田山氏を認めてゐた。 Sentimental landscape-painter——これが当時の自分が、田

山氏へ冠らせてゐた渾名^{あだな}だつた。實際氏は、小説や評論を書く合ひ間に、根気よく紀行文を書いてゐた。いや少し誇張して云へば、小説の多くも紀行文で、その中に Venus Libenti^{なんによ}の信者たる男女を点出したものに過ぎなかつた。さうしてその紀行文を書いてゐる時の氏は、自由で、快活で、正直で、如何にも青い艸^{くさ}を得た驢馬^{ろば}のやうに、純真無垢な所があつた。従つてそれだけの領域では、田山氏はユニクだと云はうが何だらうが差支へない。が、氏を自然主義の小説家たり、且思想家たる文壇の泰斗^{たいと}と考へる事は、今よりも更に出来憎かつた。遠慮のない所を云ふと、自然主義運動に於ける氏の功績の如きも、「何しろ時代が時代だつたからね」なぞと輕蔑^{けいべつ}してゐたものである。

大体こんなやうな気焰をあげてから、又成瀬と二人で、久米の下宿を出た。出た時分には、短い冬の日脚が、もう往来へ長い影を落してゐた。我々は我々のよく知つてゐる、しかも常になつかしい興奮を感じながら、本郷三丁目の角まで歩いて行つて、それから別々の電車へ乗つた。

三四日たった、これも好い天氣の日の事である。自分は午前の講義に出席してから、成瀬と二人で久米の下宿へ行つて、そこで一しよに昼飯を食つた。久米は京都の菊池が、今朝送つてよこしたと云ふ戯曲の原稿を見せた。それは「坂田藤十郎の恋」と云ふ、徳川時代の名高い役者を主人公にした一幕物だつた。読めと云ふから読んで見ると、テエマが面白いのにも関わらず、無暗に友染縮緬いうぜんちりめんのやうな台辞せりふが多くつて、どうも永井荷風氏や谷崎潤一郎氏の糟粕さうはくを嘗なめてゐるやうな觀があつた。だから自分は言下ごんかに悪作だとけなした。成瀬も読んで見て、やはり同感は出来ないと云つた。久米も我々の批評を聞いて、「僕も感服出来ないんだ。一体に少し高等学校情調がありすぎるよ」と、同意を表した。それから久米が我々一同を代表して、菊池の所へその意味の批評を、手紙で書いてやる事にした。そこへ幸ひ松岡も遊びに來た。松岡は我々三人が英文科に籍を置いてゐるのにも関わらず、独り哲学科へはいつてゐた。が、勿論我々と同じやうに、創作もする心算つもりだつた。彼は我々の中で、一番久米と親しかつた。一しきりは二人で、同じ家に下宿してゐた事もあつた。それは砲兵工廠の裏にある、職工服を造る家だつた。実生活上のロマンテイケルだつた久米は、今にあの青い職工服を着て、アトリエのやうな書齋へ西洋机を据ゑて、その書齋を久米正雄工房と名づけたいなどと云ふ、途方もない夢をよく見てゐた。自分は彼

等をその下宿に訪問すると、毎時^{いっ}もかう云ふ久米の夢を思ひ出したものだつた。が、松岡はその時分から、余り職工服とは縁のない思想なり心もちなりを持つてゐるらしかつた。まだ感傷癪こそ脱しなかつたが、彼の中には宗教の匂のするものが、もうふんだんに^{ばうは}磅礴してゐた。彼はその東洋とも西洋ともつかないイエルサレムの建設をもくろみながらキエルケガアドを愛読したり、怪しげな水彩画を描いて見たりした。当時彼の描いた水彩画の一つにさかさまにした方が遙^{はるか}に画らしくなるもののあつたのは、今でもよく覚えてゐる。その後松岡は久米が宮裏へ移ると共に、本郷五丁目へ下宿を移した。さうして今でもそこにて、釈迦^{しやかでん}伝から材料を取つた三幕物の戯曲を書いてゐた。

我々四人は、又久米の手製の珈琲^{コオレィ}を啜りながら、煙草の煙の濛々^{もうもう}とたなびく中で、盛にいろんな問題をしやべり合つた。その頃は丁度武者小路実篤氏が、^{まさ}将にパルナスの頂上へ立たうとしてゐる頃だつた。従つて我々の間でも、^{しばしば}屢氏の作品やその主張が話題に上つた。我々は大抵、武者小路氏が文壇の天窓を開け放つて、^{さわやか}爽な空気を入れた事を愉快に感じてゐるものだつた。恐らくこの愉快は、氏の踵^{くびす}に接して来た我々の時代、或は我々以後の時代の青年のみが、特に痛感した心もちだらう。だから我々以前と我々以後とは、文壇及それ以外の鑑賞家の氏に対する評価の大小に、^{けいてい}徑庭があつたのは已むを得ない。

それは丁度我々以前と我々以後とで、田山花袋氏に対する評価が、相違するのと同じ事である。（唯、その相違の程度が、武者小路氏と田山氏とで、どちらが真に近いかは疑問である。念の為に断つて置くが、自分が同じ事だと云ふのは、程度まで含んでゐる心算ぢやない。）が、当時の我々も、武者小路氏に文壇のメシヤを見はしなかつた。作家としての氏を見る眼と、思想家としての氏を見る眼と——この二つの間には、又自らかな相違があつた。作家としての武者小路氏は、作品の完成を期する上に、余りに性急な憾があつた。形式と内容との不即不離な関係は、^{しばしば}屢氏自身が「雑感」の中で書いてゐるのにも関らず、忍耐よりも興奮に依頼した氏は、屢實際の創作の上では、この微妙な関係を等閑に附して顧みなかつた。だから氏が従来冷眼に見てゐた形式は、「その妹」以後一作毎に、徐々として氏に謀叛を始めた。さうして氏の脚本からは、次第にその秀拔な戯曲的要素が失はれて、（全くとは云はない。一部の批評家が戯曲でないやうに云ふ「或青年の夢」でさへ、一いっせ齣つつ一齣つつの上で云へばやはり戯曲的に力強い表現を得た個所がある。）氏自身のみを語る役割が、己自身を語る性格の代りに続々としてそこへはいつて来た。しかもそこに語られた思想なり感情なりは、必然性に乏しい戯曲的な表現を借りてゐるだけ、それだけ一層氏の「雑感」に書かれたものより稀薄だつた。「或家庭」の昔から氏の作品に親しんでゐ

た我々は、その頃の——「その妹」の以後のかう云ふ氏の傾向には、あきた慊らない所が多かつた。が、それと同時に、又氏の「雜感」の多くの中には、我々の中に燃えてゐた理想主義の火を吹いて、一時に光焰を放たしめるだけの大風のやうな雄々しい力が潜んでゐる事も事實だつた。往々にして一部の批評家は、氏の「雜感」を支持すべき論理の欠陥を指摘する。が、論理を待つて確められたもののみが、真理である事を認めるには、余りに我々は人間的な素質を多量に持ちすぎてゐる。いや、何よりもその人間的な素質の前に真面目であれと云ふ、それこそ氏のせんめい闡明した、大いなる真理の一つだつた。久しく自然主義のお淤泥でいにまみれて、本来の面目を失してゐた人ユウマニテエ道が、あのエマヲのクリストの如く「日かたぶ昇あきて暮に及んだ」文壇に再姿ふたたびを現した時、如何に我々は氏と共に、「われらが心熱もえし」事を感じたらう。現に自分の如く世間からは、氏と全然反対の傾向にある作家の一人に数へられてゐる人間でさへ、今日も猶なほ氏の「雜感」を読み返すと、常に昔の澎湃はうはいとした興奮が、一種のなつかしさと共に還つて来る。我々は——少くとも自分は氏によつて、「驢馬の子に乗り爾なんぢに来る」人ユウマニテエ道道を迎へる為に、「その衣を途みちに布しき或は樹の枝を伐りて途に布く」先例を示して貰つたのである。

散々話をした後で、我々は皆一しよに、久米の下宿を出た。それから本郷三丁目で成瀬

と松岡とに別れた。久米と自分とは電車で銀座へ行つて、カツフェ・ライオンで少し早い晩飯をすませてから、ちよいと歌舞伎座の立見へはいった。はいると新狂言の二番目もので、筋は勿論外題^{げだい}さへ、更に不案内なものだった。舞台には悪く納った茶室があつて、造花の白梅が所々に、貝殻細工のやうな花を綴つてゐた。さうしてその茶室の縁側で、今の中^{ちゆうしや}車^{くるま}の侍が、歌右衛門の娘を口説いてゐた。東京の下町に育ちながら、更に江戸趣味なるものに興味のない自分は、芝居に対しても同様に、滅多にドラマテイツク・イリュウジヨンは起す事が出来ない程、冷淡に出来上つた人間だった。（或は冷淡にならされた人間かも知れない。芝居を見る事は二歳位の頃から、よく家のものと一しよに見た。）だから芝居より役者の芸が、役者の芸よりも土間棧敷の見物が、余程自分には面白かつた。その時も自分の隣にゐた、どこかの御店^{おたな}者^{もの}らしい、鳥打帽をかぶつた男が、甘栗を食ひながら、熱心に舞台を見てゐる方が、天下の名優よりも興味があつた。この男は熱心に舞台を見てゐると云つたが、同時に又甘栗もやはり熱心に食つてゐた。それが懐へ手を入れたかと思ふと、甘栗を一つつまみ出して、割るが早いか口へ入れる、口へ入れたと思ふと、又懐へ手を入れて、つまみ出すが早いか割つて食ふ。しかもその間中、眼は終始一貫して、寸分も舞台を離れない。自分はこの視覚と味覚との敏^{びんせふ}捷な使ひ分けに感心して、暫くは

その男の横顔ばかり眺めてゐたが、とうとうしまひに彼自身はどちらを真剣にやつてゐる心算つもりだか、尋きいて見たいやうな気がして来た。するとその時、自分の側で、久米がいきなり「橘屋あ」と、無鉄砲に大きな声を出した。自分はびつくりして、思はず眼を舞台の方へやつた。見ると成程、女をたらすより外には何等の能もなささうな羽左衛門の若侍が、従しようよう容として庭伝ひに歩いて来る所だつた。が、隣の御店おたな者は、久米の「橘屋」も耳にはいらぬやうに、依然として甘栗を食ひながら、食ひつくやうな眼で舞台を眺めてゐる。自分も今度はその滑稽さが、笑ふには余りに真剣すぎるやうな気がして来た。さうして又そこに小説めいた心もちも感じられた。しかし舞台の上の芝居は、折角その「橘屋」が御出でになつても、池田輝方氏の画以上に俗悪だつた。自分はとうとう一幕が待ち切れなくつて、舞台が廻つたのを潮に、久米をひっぱつて外へ出た。

星月夜の往来へ出てから「あんな声を出して、莫迦ばかだな」と云つたが、久米は「何、あれだつて中々好い声だよ」と自慢して容易にその愚を認めなかつた。今でもあの時の事を考へると、彼はカツフエ・ライオンで飲んだウイスキーに祟たたられてゐたものとししか思はれない。

三

「一体大学の純文学科などと云ふものは、^{すこぶる}頗怪しげな^{しろもの}代物だよ。ああやつて、国漢英仏独の文学科があるけれども、あれは皆何をやつてゐるんだと思ふ？ 実は何をやつてゐるか、僕にもはつきりとはわからないんだ。成程研究してゐるものは、各国の文学に違ひなからう。さうしてその文学なるものは、まあ芸術の一部門とか何とか云へるにや違ひない。しかしその文学を研究する学問だね、あれは一体学問だらうか。（或は独立した学問だらうかと云つても好いが。）もし学問とすれば、——むづかしく云へば *Wissenschaft* として成立するのに必要な条件を具へるとすればだね。さうすれば美学と同じものになつちまふぢやないか。いや、美学ばかりぢやない。文学史なんぞは、始から史学と同じものだらうと思ふんだ。そりや成程今純文学科でやつてゐる講義にや、美学や史学と縁のないものだつて、沢山ある。が、その沢山あるものは、義理にも学問だとは思はれないぢやないか。あれはまあよく云へば先生の感想を述べたもので、悪く云へば出たらめだからね。だから僕は大学の純文学科なんぞは、廃止しちゃつた方がほんたうだと思ふんだ。文学概論や何かは美学と一しよにする。文学史は史学へ片づけてしまふ。さうしてあとに残つた講義は、

要するに出たらめだから、大学外へ駆逐しまふんだ。出たらめだからと云つて悪るければ、余りに高尚で、大学のやうな学問の研究を目的にする所には、不釣合だと云つても好い。これは確に目下の急務だよ。さもないと同じ出たらめでも、新聞や雑誌へ出た評論より、大学でやる講義の方が、上等のやうな誤解を天下に与へ易いからね。それも実は新聞や雑誌へ出る方は、世間を相手にしてゐるんだが、大学でやる方は学生だけを相手にしてゐるんだから、それだけ馬脚が露れ^{あらは}ずにすんでゐるんだらう。その安全なる出たらめが、一層箔をつけてゐるのは、どう考へたつて不公平だ。實際僕なんぞは無責任に、図書館の本を讀まう位な了見で、大学にはいつてゐるんだから好いが、真面目に研究心でも起したら、一体どうすれば文学の研究になるんだか、途方にくれちまふのに違ひない。それや市河三喜さんのやうに言語学的に英文学を研究するんなら、立派に徹底してゐると思ふんだ。けれどもさうすると、シエクスピアだらうが、ミルトンだらうが、詩でも芝居でもなくなつて、唯の英語の行列だからね。それぢや僕はやる氣もないし、やつたつて到底ものにはなりさうもないだらう。勿論出たらめで満足してゐりや好いが、それなら御苦労にも大学へはいらずとももの事だ。又美学なり史学なりの立ち場から、研究しようと云ふんなら、外の科へ籍を置いた方がどの位氣が利いてゐるかわからない。かう考へて来ると、純文学

科のレエゾン・デエトルは、まあ精々便宜的位な所だね。が、いくら便宜でも、有害の方が多くつちや、勿論ないのに劣つてゐると云ふもんだ。劣つてゐる以上は、廃止した方が正当だよ。――何、あれは中学の教師を養成する為に必要だ？ 僕は皮肉を云つてゐるんぢやない。これでも大真面目な議論なんだ。中学の教師を養成するんなら、ちやんと高等師範と云ふものがある。高等師範を廃止しろなんと云ふのは、それこそ冠履顛倒だ。くわんりてんたうその理窟で行つても廃止さるべきものは大学の純文学科の方で、高等師範は一日も早くあれを合併してしまふが好い。」

その頃の或日、古本屋ばかり並んでゐる神田通りを歩きながら、自分は成瀬をつかまへて、こんな議論をふつかけた事がある。

四

十一月もそろそろ末にならうとしてゐる或晩、成瀬と二人で帝劇のフィル・ハアモニイ会を聞きに行つた。行つたら、向うで我々と同じく制服を着た久米に遇つた。その頃自分は、我々の中で一番音楽通だつた。と云ふのは自分が一番音楽通だつた程、それ程我々は

音楽に縁が遠い人間だったのである。が、その自分も無暗に音楽会を聞いて歩いただけで、鑑賞は元より、了解する事も頗怪すこぶるしかった。先一番よくわかるものは、リストに止めをさしてゐた。何時か帝国ホテルで、あのペッツォルド夫人と云ふお婆さんが、リストの *heilige Antonius schreiend auf den Wellen* (だと思ふ。ちがつたら御免なさい。) を弾いた時も、そのピアノの音の一つ一つは、寸刻も流動して止らない、しかも不思議に鮮あざやかな画面を、ありありと眼の前へ浮ばせてくれた。その画面の中には、どこを見ても、際限なく波が動いてゐた。それからその波の上には、一足毎に波紋を作る人間の足が動いてゐた。最後にその波と足との上に、煌々くわうくわうたる光があつて、それが風の中の太陽のやうに、眩まばゆく空中で動いてゐた。この明い幻を息もつかずに眺めてゐた自分は、演奏が終つて拍手の聲が起つた時に、音楽の波動が消えてしまつた、空虚な周囲の寂しさがしみじみ情なく感じられた。が、こんな事は前にも云つた通り、リストが精々行きどまりで、ベエトオフエンなどと云ふ代物は、好いと思へば好いやうだし、悪いと思へば悪いやうだし、更に見当がつかなかつた。だからファイル・ハアモニイ会を聞くと云つても、一向芸術家らしくない、怪しげな耳をそば立てて、楽器の森から吹いて来るオオケストラの風の音を、漫然と聞いてゐたのである。

当夜は閑院宮殿下も御臨場になつたので、帝劇のボックスや我々のあるオオケストラ・ストオルには、模様を着た奥さんや御嬢さんが大分方々に並んでゐた。現に自分の隣なぞにも、^{おしろい}白粉をつけた骨と皮ばかりの老夫人が、金の指環をはめて金の時計の鎖を下げて、金の帶留の金物をして、その上にもまだ^{あきた}慊らず、齒にも一面に金を入れて、（これは欠伸^{あくび}をした時に見えたのである。）端然として控へてゐた。が、前に歌舞伎座の立見をした時とは異なつて、今夜は見物の紳士淑女より、シオパンやシユウベルトの方が面白かつたから、それ以上自分はこの白粉と金とに埋つてゐる老夫人に、注意を払はなかつた。^{もつと}尤も彼女自身は、自分に輪をかけた、デイスイリユウジョンそれ自身のやうな豪傑だつたと見えて、舞台の上で指揮杖^{バトン}を振つてゐる山田耕作氏には目もくれず、^{しきり}頻に周囲ばかりを見廻してゐた。

その中に山田夫人の独唱か何かで、途中の休憩時間になると、我々は三人揃つて、二階の喫煙室へ出かけて行つた。するとその入口に、黒い背広の下へ赤いチヨツキを着た、背の低い人が佇んで、袴羽織の連れと一しよに金口の煙草を吸つてゐた。久米はその人の姿を見ると、我々の耳へ口をつけるやうにして、「谷崎潤一郎だぜ」と教へてくれた。自分と成瀬とはその人の前を通りながら、この有名な耽美主義の作家の顔を、^{ぬす}偷むやうにそ

つと見た。それは動物的な口と、精神的な眼とが、互に我^がを張り合つてゐるやうな、特色のある顔だつた。我々は喫煙室の長椅子に腰を下して、一箱の敷島を吸ひ合ひながら、谷崎潤一郎論を少しやつた。当時谷崎氏は、在来氏が開拓して来た、妖氣^{えうき}靨^{あいた}たる耽美主義の畠に、「お艶殺し」の如き、「神童」の如き、或は又「お才と巳之助」の如き、文字通り底気味の悪い *Fleurs du Mal* を育ててゐた。が、その斑猫^{はんめう}のやうな色をした、美しい悪の花は、氏の傾倒してゐるポオやボオドレエルと、同じ莊嚴な腐敗の香を放ちながら、或一点では彼等のそれと、全く趣^{おもむき}が違つてゐた。彼等の病的な耽美主義は、その背景に恐る可き冷酷な心を控へてゐる。彼等はこのごろた石のやうな心を抱いた因果に、嫌でも道徳を捨てなければならなかつた。嫌でも神を捨てなければならなかつた。さうして又嫌でも恋愛を捨てなければならなかつた。が、彼等はデカダンスの古沼に身を沈めながら、それでも猶^{なほ}この仕末に了へない心と—— [*une vieille gabare sans mâts sur une mer monstrueuse et sans bords*] の心と睨み合つてゐなければならなかつた。だから彼等の耽美主義は、この心に劫^{おびや}かされた彼等の魂のどん底から、やむを得ずとび立つた蛾^{ひとむし}の一群だつた。従つて彼等の作品には、常に [*Ah ! Seigneur, donnez-moi la force et le courage/ De contempler mon coeur et mon corps sans de'gout !*] と云ふせつぱつまつた嘆声^{なげき}が、瘴氣^{しょうき}の如く纏綿^{てんめん}し

てゐた。我々が彼等の耽美主義から、嚴肅な感激を浴びせられるのは、実にこの「地獄のドン・ジユアン」のやうな冷酷な心の苦しみを見せつけられるからである。しかし谷崎氏の耽美主義には、この動きのとれない息苦しさの代りに、余りに享樂的な余裕があり過ぎた。氏は罪惡の夜光虫が明滅する海の上を、まるでエル・ドラドでも探して行くやうな意気込みで、悠々と船を進めて行つた。その点が氏は我々に、氏の寧輕蔑するゴオテイエを髣髴させる所以だつた。ゴオテイエの病的傾向は、ポオドレエルのそれとひとしく世紀末の色彩は帯びてゐても、云はば活力に満ちた病的傾向だつた。更に洒落れて形容すれば、宝石の重みを苦にしてゐる、肥満したサルタンの病的傾向だつた。だから彼には谷崎氏と共に、ポオやポオドレエルに共通する切迫した感じが欠けてゐた。が、その代りに感覺的な美を叙述する事にかけては、滾々として百里の波を翻す河のやうな、驚く可き雄弁を備へてゐた。（最近広津和郎氏が谷崎氏を評して、余り健康なのを憾とすると云つたのは、この活力に満ちた病的傾向を指摘したものだらうと思ふ。が、如何に活力に溢れてゐても、脂肪過多症の患者が存在し得る限り、やはり氏のそれは病的傾向に相違ない。）さうして此の耽美主義に嫌らなかつた我々も、流石にその非凡な力を認めない訳に行かなかつたのは、この滔々たる氏の雄弁である。氏はありとあらゆる日本語や漢語を浚ひ出して、あ

りとあらゆる感覚的な美を（或は醜を）、「刺青」以後の氏の作品に螺鈿らでんの如く鏤ちりばめて行つた。しかもその氏の『Les Emaux et Camees』は、朗々たるリズムの糸で始から終まで、見事にずつと貫かれてゐた。自分は今日でも猶、氏の作品を読む機会があると、一字一句の意味よりも、寧むしろその流れて尽きない文章のリズムから、半ば生理的な快感を感じる事が度々ある。ここに至るとその頃も、氏はやはり今の如く、比類ない語ことばの織物師だつた。たとひ氏は暗澹たる文壇の空に、「恐怖の星」はともさなかつたにしても、氏の培つちかつた斑はんめ猫色ういろの花の下には、時ならない日本の魔女のサバトが開かれたのである。――

やがて又演奏の始まりを知らせる相図のベルと共に、我々は谷崎潤一郎論を切り上げて、下の我々の席へ歸つた。歸る途中で久米が、「一体君は音楽がわかるのかい」と云ふから、「隣の金と骨と皮と白粉とよりはわかりさうだ」と答へた。それから又その老夫人の隣へ腰を下して、シオルツ氏のピアノを聞いた。確たしか、シオパンのノクテュルヌとか何とか云ふものだつたと思ふ。シモンズと云ふ男は、子供の時にシオパンの葬式の行進曲を聞いて、ちやんとわかつたと広告して居るが、自分はシオルツ氏の器用に動く指を眺めながら、年齢の差を勘定に入れないでも、この点ではシモンズに到底及ばないと観念した。そのあとは何があつたか、もう今は覚えてゐない。が、会が終つて外へ出たら、車寄のまはりに馬

車や自動車、通りぬけられない程沢山並んでゐた。さうしてその中の一つの自動車には、あの金と白粉との老夫人が毛皮に顔を埋めながら、乗らうとしてゐる所だつた。我々は外套の襟を立てて、その間をやつと風の寒い往来へ出た。ふと見ると、我々の前には、警視庁の殺風景な建物が、黒く空を衝いて聳えてゐた。自分は歩きながら、何だかそこに警視庁のある事が不安になつた。で、思はず「妙だな」と云つたら、成瀬が「何が？」と聞き咎めた。自分はいやとか何とか云つて、好い加減に返事を胡麻化した。その時はもう我々の左右を、馬車や自動車が盛んに通りすぎてゐた。

五

ファイル・ハアモニイ会へ行つたあくる日、午前の大塚博士の講義（題目はリツケルトの哲学だつた。これが自分が聞いた中では最も啓発される所の多かつた講義である）をすませた後で、又成瀬と風の吹く中を、わざわざ一白舎へ二十銭の弁当を食ひに行つたら、彼が突然自分に、「君は昨夜僕等の後にゐた女の人を知つてゐるかい。」と尋ねた。「知らない。知つてゐるのは隣の金と皮と骨と白粉とだけだ。」「金と皮と——何だい、それは

。「何でも好い。兎に角、後にゐた女の人ぢやない事は確だ。さうして君は又その女の人に惚れでもしたのかい。」「惚れる所か、僕も知らなかつたんだ。」「何だ、つまらない。そんな人間なら、ゐたつてゐなくなつて、同じ事ぢやないか。」「所がね。家に帰つたらムツタアが後の女の人を見たかと云ふんだ。つまりその人が僕の細君の候補者だつたんださうだね。」「ぢや見合ひか。」「見合ひ程まだ進歩したものぢやないんだらう。」「だつて見たかつて云へば、見合ひぢやないか。君のムツタアも亦、迂遠うゑんだな。見せる心算もりなら、前へ坐らせりや好いのに。後にゐるものが見える位なら、こんな二十銭の弁当なぞ食つてゐやしない。」「成瀬は親孝行な男だから、自分がかう云ふと、ちよいと妙な顔をした。が、すぐに又、「しかし向うの女の人を本位にして云へば、僕等が前にゐた事になるんだからな。」「成程、あすこぢや両方で向ひ合つてゐようと思つたら、どつちか一方が舞台へ上らなくつちやならない訳だ。——訳だが、それで君は何つて返事をしたんだい。」「見なかつたつて云つたあね。實際見なかつたんだから仕方がないぢやないか。」「さう今になつて、僕に鬱憤を洩したつて駄目だよ。だが惜しい事をしたな。一体あれは音楽会だつたから、いけないんだ。芝居なら僕が頼まれなくつたつて、帝劇中の見物をのこらず物色をしてやるんだのに。」「——成瀬と自分とはこんな話をしながら、大笑ひに笑

ひ合つた。

その日は午後には、独逸語の時間があつた。が、当時我々はアイアムビツクに出席するとか何とか云つて、成瀬が出れば自分が休み、自分が出れば成瀬が休んでゐた。さうして一つ教科書に代る代る二人で仮名をつけて、試験前には一しよにその教科書を読んで間に合せてゐた。丁度その午後の独逸語は成瀬が出席する番に当つてゐたから、自分は食事をしまふと、成瀬に教科書を引き渡して、独りで一白舎の外へ出た。

出ると外は^{こがらし}凧が、砂煙を往来の空に捲^まき上げてゐた。黄いろい並木の^{いてふ}銀杏の落葉も、その中でくるくる舞ひながら、大学前の古本屋の店の奥まで吹かれて行つた。自分はふと松岡を訪ねて見ようと云ふ氣になつた。松岡は自分と（恐らくは大抵な人と）違つて大風の吹く日が一番落着いて好いと称してゐた。だからその日などは殊に落着いてゐるだらうと思つて、何度も帽子を飛ばせさうにしながら、やつと本郷五丁目の彼の下宿まで辿りつく、と、下宿のお婆さんが入口で、「松岡さんはまだ御休みになつていらつしやいますか」と、氣の毒さうな顔をして云つた。「まだ寝てゐる？ 恐ろしく寝坊だな。」「いえ、昨夜徹夜なすつて、ついさつきまで起きていらしたんですがね、今し方寝るからつて、床へおはいりになつたんでございますよ。」「ぢやまだ眼がさめてゐるかも知れない。兎に角ち

よいと上つて見ませう。寝てゐればすぐに下りて来ます。「自分は松岡のある二階へ、足音を偷みながら、そつと上つた。上つてとつっきの襖を^{ふすま}あけると、二三枚戸を立てた、うす暗い部屋のまん中に、松岡の床がとつてあつた。枕元には怪しげな一閑張^{いっかんばり}の机があつて、その上には原稿用紙が乱雑に重なり合つてゐた。と思ふと机の下には、古新聞を敷いた上に、黴^{おびただ}しい南京豆の皮が、杉形^{すぎなり}に高く盛り上つてゐた。自分はすぐに松岡が書くと言つてゐる、三幕物の戯曲の事を思ひ出した。「やつてゐるな」——ふだんならかう云つて、自分はその机の前へ坐りながら、出来ただけの原稿を読ませて貰ふ所だつた。が、生^あ憎^{いにく}その声に応ずべき松岡は、髭ののびた顔を括^{くく}り枕^{まくら}の上にのせて、死んだやうに寝入つてゐた。勿論自分は折角徹夜の疲を癒してゐる彼を、起さうなどと云ふ考へはなかつた。しかし又この儘歸つてしまふのも、何となく残り惜しかつた。そこで自分は彼の枕元に坐りながら、机の上の原稿を、暫^{しばら}くあつちこつち読んで見た。その間も夙はこの二階を揺ぶつてしつきりなく通りすぎた。が、松岡は依然として、静な寢息ばかり洩してゐた。自分はやがて、かうしてゐても仕方がないと思つたから、物足りない腰をやつと上げて、静に枕元を離れようとした。その時ふと松岡の顔を見ると、彼は眠りながら睫毛^{まつげ}の間へ、涙を一ばいたためてゐた。いや、さう云へば頬の上にも、涙の流れた痕^{あと}が残つてゐた。自分はこ

の思ひもよらない松岡の顔に気がつく、さっきの「やつてゐるな」と云ふ元気の好い心
もちは、一時にどこかへ消えてしまった。さうしてその代りに、自分も夜通し苦しんで、
原稿でもせつせと書いたやうな、やり切れない心細さが、俄に胸へこみ上げて来た。「莫
迦な奴だな。寝ながら泣く程苦しい仕事なんぞをするなよ。体でも毀したら、どうするん
だ。」——自分はその心細さの中で、かう松岡を叱りたかつた。が、叱りたいその裏では、
やつぱり「よくそれ程苦しんだな」と、内証で褒めてやりたかつた。さう思つたら、自分
まで、何時の間にか涙ぐんでゐた。

それから又足音を偷んで、梯子段を下りて来ると、下宿の御婆さんが心配さうに、
「御休みなすつていらつしやいますか」と尋いた。自分は「よく寝てゐます」とぶつきら
ぼうな返事をして、泣顔を見られるのが嫌だつたから、
不変、砂煙が空へ舞ひ上つてゐた。さうしてその空で、
氣になつたから上を見ると、唯、小さな太陽が、白く天心に動いてゐた。自分はアスファ
ルトの往来に立つた儘、どっちへ行かうかなと考へた。

(大正七年十二月)

青空文庫情報

底本：「現代日本文学大系」芥川龍之介集」筑摩書房

1968（昭和43）年8月25日初版第1刷発行

入力：j.utiyama

校正：小浜真由美

1998年6月22日公開

2005年11月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

あの頃の自分の事

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>